

心に残ること

田 中 衛 子

私は、1998年4月、愛知大学豊橋校舎の最初の日本語教育担当教員として着任した。長い歴史があり、留学生も多く受け入れてきていたこの大学の核である豊橋校舎に、その時まで「日本語」の科目はありながら、専任の日本語教員が一人もいなかったというのは、驚きであった。しかし、一方、最初の担当教員として迎え入れられたことは、喜びでもあった。それと同時に、責任も強く感じた。

当時は、留学生別科は短期大学部に属しており、国際コミュニケーション学部は新学部として独自のカリキュラムがあったので、私が担当するのは、基本教育科目の「日本語学」と「日本語教育入門」の講義、及び文学部と経済学部の留学生の日本語の授業と、協定校からの交換留学生の「日本語コース」の授業ということであった。

この「日本語コース」は「コース」というものの、当時の日本語の授業は週に2コマしかなかった。これでは、協定校からわざわざ日本語の勉強に来日する留学生が気の毒だと思い、はずかしいとも思った。このコースは国際交流委員会のもとにあったので、委員会に申請して、「日本語」の授業を8コマと「日本事情」を2コマにしてもらうことができた。日本語の非常勤の教員を、3人頼めるようにもなり、これは大きい前進であった。しかし、1年しかない留学期間を考えると、「日本語」が10コマ「日本事情」が2コマの、計12コマにしてもらえないかと思い、関係者に打診したが、これは実現しなかった。

実は、着任した初年度に、大学院生、学部生、協定校からの学生、そして、別科生のすべての留学生を視野に入れた、日本語教育を総括的に行なうための組織作りを提案したが受け入れてもらえなかった。その後、名古屋校舎の日本語担当の先生と相談して、豊橋・名古屋両校舎の学部学生のための「日本語」の新カリキュラムを作成し、提案した。これは受け入れられて、2002年度から実施されている。国際コミュニケーション学部の留学

生も、この年から、経済学部、文学部の留学生と共に「日本語」を履修することになった。またこの年から、留学生別科も短期大学部から離れて大学の付属組織となり、学部の日本語担当教員が関わることになった。ただし、組織がえが急だったために体制に無理があるので、抜本的な変革が必要である。これは大きな課題であり、愛知大学を去るにあたって、非常に心残りなことのひとつである。もう一つの心残りは、大学院国際コミュニケーション研究科の日本語及び日本語教育関係のことである。これの設置とそこでの教育に関わることができたのは喜びであったが、発足してまだ2年で、し足りないことが多々あり、心が残る。

短い任期だったが、その間に、教育とは別に、私の一生の中での大きいできごとが二つあった。第一のことは全く個人的なことだが、その節の、武田学長、桂学部長をはじめ同僚の方々の、また、大学の皆様の暖かいお心づかいは生涯忘れない。感謝と共にいつも心にあり、常に生きる支えになっている。第二は、2002年9月11日のニューヨークの同時多発テロ事件である。その朝、私はロサンゼルスにいた。アメリカの東海岸地方と西海岸地方との間には、約3時間の時差があるので、このニュースは、西海岸の人より日本の人の方が早く知ったようである。それはともかく、この事件の起こった時にアメリカにいて、事の重大さを刻々と実感したことは、希少な経験であった。しかし、私にとってはそうであったが、この時も、渡辺学部長をはじめ皆様にご心配いただいたことは、終生忘れ得ない。

組織の中で、周囲の同意を得ながら何かを変えたり、何かを作りあげたりするには時間がかかる。そのために、思いつつもし残したこともあるが、留学生の日本語教育の基礎的な部分は、一応、できたのではないかと思う。日本語教育に携わってきた長い年月の最後の職場として、愛知大学での場が与えられたことに感謝している。仕事はやりがいがあり、充実した日々であった。し残したことは、後輩に託したい。愛知大学での日本語教育の今後の発展を、心から祈るものである。